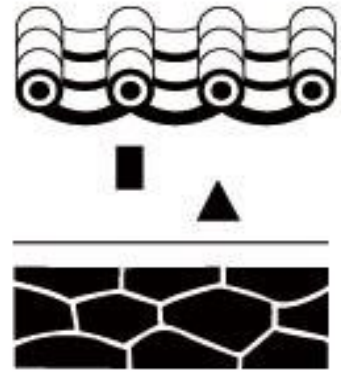


OGO 第77号 小田原ガイド協会だより

平成30年9月1日発行（秋号・季刊）

NPO 法人 小田原ガイド協会 〒250-0014 小田原市城内 3-22
TEL 0465-22-8800 FAX 0465-22-8814
ホームページ URL <http://www.odawara-gaido.com>



今時の町あるきを考える

副会長 森尻義雄

町あるきという言葉、別に新しい言葉でも概念でもないのに、言葉から受ける印象はなぜか新鮮だ。

山を歩けば山歩き、公園や丘を歩けばハイキング、でも町を歩くから町あるきとは普通は言わない。考えてみれば、日常生活の中で毎日町あるきしている。普段にある行為なのになぜかこれが「まちあるき」という言葉の持つ意味と結びつかない。登頂や踏破到達を主たる目的としないのが「まちあるき」だからだろうか。

「ガイドします」と「町あるきしませんか」と呼びかけた場合、どう感じるだろうか。勿論お城という史跡の中ならば「ガイドします」が適当だろうが、まちなか案内には「ガイドします」はお客様に固い殻をかぶせてしまう可能性がある。

当協会は年間約八十日、駅からガイドとして、小田原駅か

ら小田原城まで町あるきしている。市内の老舗や賛助会員様を紹介する町あるきもしている。他の企画ガイドでも必ず、町あるきの概念を組込んでいる。既に町あるきガイドを実践しているのに、今まで「まちあるき」という言葉の持つイメージと観光ガイドと言う言葉が結び付いていなかった。「まちあるき」をやっているのに「まちあるき」という言葉そのものを使用してこなかった。これは二つの言葉の持つ意味の違いに無意識に拘っていた可能性もある。

来年三月に第六回日本「まちあるき」フォーラムで小田原が開催される。そのプレイベントのチラシの中に、今全国各地でブームになっている「まちあるき」というフレーズがある。町あるきがブーム？誠に不思議な感じがするが、世界観光機構の統計によれば観光は世界のGDPの9%占めており、一人に一人の割合で雇用者が携わっているとの報告がある。世界において観光は主産業になつており、観光による地域振

興は成長戦略の柱。その地域振興、観光振興の取組の一つとして巻き起こっているのが町あるきのブームなのだ。

町あるきは日常の地域活動が主役、垣間見る日常の生活の中に地域のひととの触れ合いがある。日常の暮らしの中で出会う何気ない一場面、些細な会話、お客を引き付ける言葉の一つ一つ、何気ない気づきや新しい発見が旅の思い出に残る。小田原を育み小田原に溶け込んだ様々な心、例えば「ものつくり・庭園・老舗・宿場・歴史建物」こういったこととの出会いが「まちあるき」の醍醐味であり、町あるき観光はより大きく推進されて行く。それが三百六十五日いつでも楽しめる日常の小田原観光に繋がる要素なのだろう。

もちろんガイド協会には「まちあるき」という言葉ではなく、適切な〇〇ガイドという言葉が適している場面が数多くあるが、観光振興を考えればこのような「まちあるき」の精神を心がけて推進して行くことも必要なことだと考えている。

小田原町内の ふたつの報徳社

尊徳記念館学芸員

坂井飛鳥



幸田露伴の小説
「二宮尊徳翁」の挿絵

江戸後期に各地の農村復興に携わった二宮尊徳。その教えを受けた人々の一部は、尊徳の仕法を参考に「報徳社」と呼ばれる相互扶助組織を立ち上げた。報徳社の活動内容は地域差があるが、その基本は、社員間で資金を出し合い、プールした資金を無利息で社員に貸し付けるというものであった。

その報徳社の嚆矢が、天保十四年（一八四三）に結成された「小田原宿報徳社（のちに小田原報徳社）」である。同社は竹本屋幸右衛門ほか二名が世話人となり、尊徳から拝借した一六〇両を元手とする貸付事業を同年より開始した。幸右衛門の病气などが原因となり弘化年間に活動停止状態に陥るが、世話人の交代により活動を再開、安定した経営を継続できるようになっていく。

小田原報徳社再興時の世話人は、菓子屋久蔵・多喜蔵の兄弟と片野屋

治右衛門の三人であった。

このうち多喜蔵は報徳社運営の指導役を請われて静岡に移住、名を福山滝助に改め、岡田佐平治・良一郎親子の運営する遠江国報徳社（のちの大日本報徳社）に伍する規模の活動を見せた。

創立時・再興時の世話人はいずれも商家であるが、その規模は中小程度のものであった。ほかの社員も同様で、明治時代に入り、全国の主要な町場の商人一覽といった名鑑のようなものがつくられるようになるが、小田原報徳社の関係者でそれらに掲載されるような人物はごくわずかであった。相互扶助による資金融通が活動の基礎であることから、小田原報徳社の参加者の多くは、それを必要とする中小の商人や職人が大半を占めていたものと思われる。

社員個々人の家格はそれなりであったが、小田原報徳社の組織自体はかなり強固なものであった。再興以

来の貸付事業は金額の上限設定と返済の確実化により、年が経つにつれてその規模を大きくしていった。また、全国で唯一、尊徳から直接出資を受けた報徳社という由緒と伝統があり、周辺村のみならず隣県にも支社を持つなど、組織は小さいながらも各地の報徳社の中では抜きん出た存在感を放っていた。

当時の町内には、小田原報徳社とはまた別の報徳社も存在していた。その名前を「報徳会小田原社」とい、明治二十四年の創立で、尊徳の高弟の一人で湯本在住の福住正兄の指導を受けていた。正兄は著作などを通じて報徳社の組織化を積極的に推し進めており、県央の大住郡から県西の足柄上下両郡にわたる地域では、その影響下にある報徳社が多数存在していた。その数の多さから、明治十五年前後に地域の報徳社を統括する組織が相次いで組織されている。このうち、足柄下郡を取りまとめていた「誠励社」という組織の傘下に「小田原支社」の名を見ることができる。このことから、小田原町内においては明治十年代の時点で正兄の影響下にあった報徳社がすでに活動していたことが読み取れる。

正兄系列の報徳社の社員は町内でも上位にあたる商人らが名を連ねており、中小の商人が中心であった小田原報徳社とは、だいぶ異なる構成となっている。具体的に名をあげると、町長の今井徳左衛門を筆頭に、のちの四代目町長の今井廣之助、五代目助役がかつての本陣のひとつ片岡本陣の片岡永左衛門、老舗の旅籠である小伊勢屋の尾崎壯三、現在も続く紙・茶販売の江島照作らが参加していたほか、町会議員も複数加入していた。まさに、町の政治・経済の担い手たちによつて運営された報徳社だったのである。

ふたつの報徳社の間に連携は存在しなかったが、あることをきっかけに両者は接近するようになる。それが明治二十七年の報徳二宮神社の建設であった。当時、尊徳ゆかりの今市・桜町と熾烈な神社誘致の競争を繰り広げていた小田原では、関係者が一丸となって誘致運動に取り組んでおり、両報徳社も手を組んで、社地の提供や他町村の報徳関係者へのアピールを行っていた。神社建設の念願がかなって以降も、神社の管理などで両社の共同関係は続くこととなる。

明治中期以降、時代の変化とともに

に経営状態が悪化していた両社間で合併を模索する動きが起こる。そして、明治三十四年に報徳会小田原社が小田原報徳社に合流する形で二つの報徳社の合同が実現した。しかし、それでも経営難は解消されず、活動は先細りを続けていった。大正期以降、小田原報徳社は自社同様に運営に苦勞していた県内外の報徳社に協力を呼びかけ、全国規模での報徳社の連携の道を探るようになる。この計画は最終的に、全国の報徳社が掛川の大日本報徳社傘下に入るという形で実現することとなった。連携の中心にあった小田原報徳社は、その後も大日本報徳社の支社として、戦後に至るまで活動を継続させていくことになるのである。



報徳二宮神社

ガイド養成講座の現状

養成講座運営委員

飯田敏明

平成二十四年四月にスタートしたガイド養成講座も丸六年が経過し、現在本年度の受講生(第七期生)十三名が講義や実習と自主研究に励んでいるところです。

養成講座開講以前には小田原シルバー大学歴史観光科卒業生がガイド協会員となっていたわけですが、協会員九十一名のうち四十二名が養成講座出身者となっている状況を見ても、今後のさらなるガイドとしての質の向上や協会の運営について携わっていく人材の確保のためにも養成講座の重要性が一層増してきています。

この状況に対応するため、養成講座のカリキュラムを見ても毎年見直しが行われ、第五期までは主として協会員が講師として講義や実習を行っていましたが、講義内容の高度化を図り第六期では十二講座が外部の専門講師となり、さらに第七期ではそれが二十講座に増えています。この外部専任講師の講義の多くは

公開講座とし、協会員の参加とレベルアップも図っています。ただ、講義内容が充実する一方において専門的なため、受講生の中でその分野の基礎知識が十分でない方や定説・通説を知らない方にはどのような理解し実地に生かして行くのか戸惑う点もあるのではないのでしょうか。

外部講師の高度で専門的な知識をいかにガイドに取り込んで行くのかも学んでもらう必要があると思います。また、受講生の中には必ずしもガイドとなることを前提とせず自己の知識の涵養を目的としている人もいるようですが、ガイドとなるために真剣に学ぼうとしている人とは温度差があるようです。今後は養成講座の位置づけをより一層明確にして、その目的によって講座内でガイドとしての基本(心構え、姿勢、態度等)を徹底するのか、協会入会希望者には別途ガイドとしての基本の研修時間を設けるのか検討する必要がありますかと思えます。

市をはじめ関係団体等の今後の方針や取り組みによって、養成講座もさらに改善充実させていかなければならない点が多々出てくると思います。皆さん方の建設的な提言も是非お願いいたします。

木兎のささやき



ことしは白秋 童謡百年。鈴木三重吉の児童雑誌「赤い鳥」が発行されたのが一九一八年七月、ちょうど百年前だ。北原白秋はその童謡部門を担当していた。創刊号に載った童謡は「りすりす小栗鼠」。

最初の頃「赤い鳥」の童謡にはメロディがなかった。童謡は子供たちが自分で好きなように節をつけて歌うのが良いというのが白秋の考え方。だから固有の旋律はいらない。初めて作曲者がついたのは翌年の五月号。西條八十の「カナリヤ」に楽譜を載つけたところ大きな反響を呼んだ。しだいに全曲にメロディがつくようになる。

この頃は、ひとつの作詞に複数の作曲家がメロディをつけることがよくあった。「砂山」は中山晋平、バージョンと山田耕筰、バージョンがある。「ちんちん千鳥」にいたっては、近衛秀麿など六人が作曲している。これも自由に選んで歌ってほしい白秋の考えの現れか。

(T)

◆梅雨時の開催秘話◆ 企画ガイド

「箱根・イワタバコと千仞の谷を散策」

神田 耕治

今回は宮ノ下周辺と千仞の谷を散策します。更にイワタバコの可憐な花に出会おうというなんとも贅沢なコースです。

多くのメデイアに取り上げてもらったおかげで多数の方々の申し込みを頂きました。三月、四月にガイド員が数回集まり、コースや開催日を決める打ち合わせをしました。開催日が早くても遅くてもイワタバコは咲いていません。当日雨が降ったら道が滑って安全が確保できないため中止です。過去のデータによると六月の後半が咲いている確率が高いとか。なかでも六月二十二日が晴れて一番いいと提案がありました。提案を信じその日に決定です。ガイド員七名は何度も現地を歩き準備をしてきました。梅雨時です。本番当日の天気は心配です。一週間前の天気予報は雨。

毎日天気予報を見て一喜一憂でした。いよいよ当日です。朝早く起きて空を見上げると晴れていました。「良かった」と

心の中で叫びました。参加者は七十八名です。狭い道を一列で進みます。明治の初め、多くの外国人も訪れ、その様子がセピア通りに残っています。

いよいよ堂ヶ島溪谷の入口です。ほぼ降りたあたりにイワタバコの群生です。見事に可憐に咲いておりました。お客様の歓声が聞こえしばし見入っておりました。早川左岸には四百年前の「基盤岩」が露出しており滅多に見られない地形をお客様にご説明しました。

そして千仞の谷です。前日の雨で足元が悪いので注意しながら歩きました。途中、川久保発電所の広場で箱根八里を皆さんと合唱しました。底倉温泉では温泉が自噴している様子が見えます。この温泉を守るために登山鉄道建設時、線路の計画を変更したとご案内。最後は富士屋ホテルのガイドで終了しました。天気とイワタバコの花に恵まれた六月二

十二日でした。

◆真夏の親子探検◆ 企画ガイド

飯田 宗男

八月十三日真夏日、朝からの強い日差しのなか親子九組十九名がUMECOに集合。約一時間、諏訪間天守閣館長から小田原城の歴史や特徴について講義を受けた。多くの参加者は無駄口もなく熱心に聞き入っており、終わった後に判らなかつたことを親に確認している子もいた。

いざ現地に出発。ここからが我々ガイド協会メンバーの出番。四班に分かれて城址公園に向かった。途中、幸田口門のところど土塁の雰囲気を実感し、大手門跡で古地図に見入り、ようやく城址公園・馬出門へ。「枳形」「狭間」などノートにメモを取っている子や耳を傾けている親の姿が見えた。銅門では攻める側

の閉塞感を味わうと共に、土塀の貫、石落し、門扉下の隙間など、守る側の色々な工夫にも感心していた。常盤木門では石垣の矢穴や楔跡、軒丸瓦の三つ葉葵にも「ふうん」本丸に入った頃には、暑さと多くの情報でかなり疲れている様子が見られたが、天守を眺めながら最後の説明と質問タイムで一通り終了した。

小学校低学年の子には少々きつかったようにも感じるが、猛暑の中、熱中症や事故怪我もなく無事に終えられてよかった。小学生といえど、知識の豊富な子もいて、参加者のレベル差をいかにカバーするかの課題を実感した。今後の課題でもある。いずれにしても、参加した子供たちが夏休みの課題としてうまくまとめられることを期待したい。

六月以降の退会者

河口 俊さん

ありがとうございました。

ジオパークとは

まずジオパークとは、私たちの住む大地が、私たちの歴史と文化を、目に見えて教えてくれる学びの場所と想ってください。パークは公園ではなく、教えてくれる場所と考えていただき、ジオパーク委員会が小田原・真鶴・湯河原・南足柄を含めて箱根地区の代表的な場所をジオサイトに選んでいるのです。選ばれていないジオサイトがたくさんあります。是非、今回の四回シリーズを読んでいただき、自分が選ぶジオサイトを探していただければ幸いです。

地球の誕生

私たちの生活している大地について、地球の誕生からひとときたいと思います。太陽や地球の存在する以前に、太陽よりも大きな星が寿命で大爆発を起して、熱いかけらを宇宙へばらまきました。熱く燃えるかけらは衝突しながら大きな塊となり、やがて大きな地球が誕生しました。

大きな塊は、二酸化炭素などのガスと岩石と鉄が混じり合った物体でした。やがて、混じり合った状態から、重い順に中心へ鉄、その周りに岩石、一番上に軽いガスが並ぶ地球に発展しました。地球は熱く燃えるかけらの集まりであったことを

やさしい ジオパークの話 第一回

地球の誕生

真木 和男

思い出してください。鉄も岩石も熱いドロドロの固体です。鉄を核といい、岩石をマントルといます。表面の岩石だけは冷えて硬くなった固体で、これをプレートと呼んでいます。

マントルとプレート

風呂の湯沸かし器にあたる鉄の核が、風呂の中のお湯にあたる岩石のマントルを沸かし

ます。沸いたマントルは上昇してお湯の表面を対流しながら、冷えたら下降します。はじめに地球を覆っていた一枚のプレートは、下を流れるマントルの対流の力でひびが入ります。はじめに一枚であったプレートは、ひびによって、海のプレートと陸のプレートの十数枚に分かれました。日本の周りには、太平洋プレート、フィリピン海プレート、北米プレート、ユーラシアプレートの四枚のプレートが集まっています。

プレートの誕生と消滅

プレートは誕生と消滅を繰り返しています。海のプレートはほぼ中央にある海嶺でマントルは上昇し、プレートが誕生します。誕生した海のプレートは陸のプレートの方へ移動します。海のプレートの岩石は重い玄武岩で、陸のプレートの岩石は軽い花崗岩でできています。重い海のプレートと軽い陸のプレートの衝突するところに海溝があります。重いものが軽いものの方へ海溝で潜り込み、軽いプレートは消滅し

ます。

私たちのジオサイト

プレートの衝突で起きる様々な現象が、私たちの大地に火山、地震など変化を及ぼし、地球の生きた活動を教えてくれています。これらの見える場所のすべてがジオサイトです。大地を学べるジオサイトを探したいと思います。次回以降のシリーズでは、個別にわかりやすく紹介していきます。なお、わかりやすい説明に重点を置きますので、正確さに欠ける点が多々あることをご了解ください。



右上へ上昇している横割れ目を持つ岩石は、元の岩盤を割りながらマグマが上昇してきた

No.	秋の企画ガイド	日時・集合場所	参加費	コース
1	箱根八里（旧東海道）天下の嶮を歩こう①「小田原宿から箱根湯本」	9月29日（土）9時～15時頃 小田原駅東口二宮金次郎像前	600円	小田原駅～江戸口見付～北条稲荷～小田原宿～板橋見付～松永記念館（昼食）～板橋地藏尊～小田原用水～一里塚跡～紹太寺～箱根湯本
2	小田原府内の二宮金次郎ゆかりの地を巡る	10月14日（日）9時～11時30分頃 小田原駅西口三省堂書店前	500円	小田原駅西口～吉野屋敷跡～服部屋敷跡～二宮神社～報徳役所跡～新蔵～小田原駅東口
3	小田原のまちあるき＆ものづくり体験	10月20日（土）9時～12時30分頃 小田原駅東口二宮金次郎像前	2000円	小田原市内の店舗の紹介とものづくり店での実地体験（今回は露木木工所でのフォトフレームの作成）
4	白秋聖地巡礼 100年前 小田原に詩聖がやってきた	10月22日（月）9時30分～12時30分頃 箱根登山鉄道 箱根板橋駅	1000円	箱根板橋駅～伝肇寺～からたちの花の小径～野外劇場～西海子小路～御花畑～白秋童謡館
5	箱根八里（旧東海道）天下の嶮を歩こう②	11月10日（土）9時～15時頃 箱根湯本駅改札口	600円	箱根湯本～畑宿を予定
6	小田原版「坂の上の雲」	11月29日（木）9時～14時30分小田原駅東口予定	600円	小田原市内の政財界、軍人邸跡を訪ねる

各コース参加申込は、実施日の45日前からです。申込み 電話番号：0465-22-8800
小田原ガイド協会HPでもご案内しています。



リレーエッセー わたしの城旅①
新装なった名古屋城御殿
井上かほる

日本列島の記録的な猛暑の中、復元なった名古屋城の見学に赴きました。寛永十一年家光再度の上洛に際して本丸に寝殿が建造され、これに付属する一連の殿舎を含め「上洛御殿」という。小田原城本丸内にも「将軍家宿舎」が建てられたが全体の平面図は両者よく似ているのは偶然か。

小田原の本丸御殿は元禄十六年の地震で倒壊する。名古屋の御殿は保存され続け、昭和二十年五月戦災で焼失した。だがそれ以前に障壁面などは疎開されていて、今回の復元に現代の科学的な技術が使われ当時の雰囲気再現された。

御殿の内部は、家光再上洛に際して新築された上洛殿を指すが、内部の装飾は欄間や天井に至るまで目をみはる見事さ。暑さをしばし忘れる。車寄せから玄関と進み、本丸御殿のなか最も華麗な建物で、桃山美術を好んだ家光の趣向を反映している。極彩色の彫刻、天井は二重折上の格天井、湯殿書院には板の間の流し、蒸し風呂を据え、一の間、二の間、その西に上段の六畳間がありそこに上る。そこに敷かれた布が風呂敷です。

編集後記

今号より編集委員メンバーが変わり、紙面のコーナーもちょっと変化しています。気づきましたか？ 馴れない作業の連続でしたが、なんとか発行にたどり着けました。

編集委員

磯崎知可子（委員長）

鈴木康子 戸田博史

中村哲夫 宮澤周子

（磯）